

平成29年度 学校自己評価表 (計画段階・実施段階)

9

福岡県立小倉南高等学校長

(No.1)

学校運営計画				評価	
学校運営方針		志を持って意欲的に学び、確かな学力、健やかにして豊かな情操を身に付けた人間の育成に努め、生徒一人一人の自己実現を目指し、社会の変化に対応して社会を支え、国際社会で活躍できる人材を育成する。			
昨年度の成果と課題		本年度重点目標	具体的目標		
部課長制の新たな運営組織のもと、系統的・組織的な校務運営を図ることで、統一的で実効性と継続性を持つ教育活動を展開することができつつある。 本年度は、使命感、倫理観を持った教職員の協働体制のもと、○更なる教師力向上(教科指導力、生徒指導力)による進学校として信頼される学校づくり、○共通理解、共通実践を基盤とした部課長制による更なる系統的、組織的な校務運営、○教育活動に対する迅速・的確な検証・分析及び改善を行うことを課題とする。		教育方針 「鍛え、ほめ、可能性を伸ばす」	凡事徹底(時を守り、場を清め、礼を正す)		
		「自主」「創造」「親愛」の校訓のもと文武両道の伝統を継承し、学習活動、部活動、特別活動等に意欲的、主体的、協働的に取り組む生徒の育成に努めるとともに、社会の変化に的確に対応した学校改革を積極的に進め、生徒に高い進路希望を持たせ、確実に目標実現させるための教育活動を学校全体として計画的に行う。また、人権尊重の精神を涵養し、いじめ、暴力、差別等は絶対に許さない人間教育を根幹とした教育に取り組む。	人権尊重の精神の涵養(いじめ、暴力、差別等の撲滅)		
			「授業で勝負する」の理念のもと常に日々の授業を分析検証し、改善に向けて努力し、学習意欲の向上を図る。(センター試験出題の知識レベル活用力育成、二次力育成)		
			「サザンクロスプラン」を軸とした南高PRIDEを確かなものとする「スタンダード」の確立		
			特別活動(生徒会活動、学校行事、ホームルーム活動)、部活動や海外短期留学、ボランティア活動等とおした逞しい人間力育成		
			関係機関(地域、大学等教育機関)との連携によるDAL(Deep Active Learning)		
			部課長制の利点を生かし各分掌や委員会業務の充実を図るとともに、学校全体の課題に対する協働体制づくり		
			本校の教育実践の広報活動に努め、学校全体で本校の教育に共感を抱く保護者、生徒の拡大を図るとともに、挑戦意欲旺盛な生徒の獲得		
	教育公務員としての高い倫理観と服務規律を遵守する姿勢の徹底				
	I C T機器活用、アクティブラーニングの視点による授業改善、観点別評価研究				
部分掌・学年	評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度の主な課題
教務	学 務	・ 教科指導の充実と学力の向上を目指す。	1・2学年特別進学クラスを編成し、顕著な学力の伸長を達成するために、より効果的な教育活動を展開する。		
			進路部と連携し、2学年及び3学年において進路希望に応じた類型を設置し、より一層の学習効果を図る。		
	・ 授業規律の確立に努める。	生徒、教員ともにチャイム席を遵守し、授業時間の確保に努める。			
		授業を生徒指導の最適の場と捉え、緊張感のある授業を展開する。			
課	・ 出席率 1年：99.5% 2年：99.0% 3年：99.0% 全体：99.2%	・ 出席率の向上に努める。	学習・生活指導の充実を図るために、ライフレポートの効果的活用に努める。		
			出席統計と学習時間の統計を毎月提示し、効果的活用に努める。		
部	企 画 ・ 広 報	・ 校内の円滑な行事運営に努める。	行事・儀式等の円滑な運営のための企画・立案や各部との調整を図る。		
			二ヶ月分の行事予定表(細目)を各月の月上旬までに配付し、各行事の周知徹底を図る。		
	・ P T A活動の活性化を図る。	・ P T A活動を推進し、学校と家庭との相互理解を深める。	P T Aとの連携を強化し、学校と家庭との相互理解を図るとともに、適切な運営とP T A活動の活性化に努める。		
課			学校要覧、学校案内等の内容の充実や学校ホームページの更新を随時行い、より効果的な広報活動を推進する。		

部分掌・学年		評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	
生徒	指導課	1. 基本的生活習慣 ア 課外出席率 <u>98.0%</u> イ 授業出席率 <u>99.2%</u>	・基本的生活習慣の確立 校則・マナーの遵守	社会規範・校則遵守の精神の涵養と自己指導能力の育成に努める。		
		2. PTA合同「挨拶運動」 各学期毎3日間実施		「学校いじめ防止基本方針」を策定するとともに、「いじめ防止・撲滅」に対する全職員・生徒の意識の高揚を図り、「いじめの早期発見・早期対応」体制の整備・充実に努める。		
生徒	指導課	3. 部活動目標 ア 加入率 <u>8.6%</u> イ 県大会 運動部 15 ウ 九州 5 エ 全国 4 (以上延べ)	・愛校心、帰属意識を高める	生活指導の徹底を図り、校則違反や特別指導の減少に努める。		
				職員、生徒、保護者が一体となって「挨拶運動」の取組を推進する。		
部	健全課	・生徒及び職員の心身の健康維持増進。 ・委員会活動の活性化。 ・生徒情報の把握と円滑な生徒支援。	・保健室利用者数の把握 ・保健日より定期的発行 ・事務室と連携し校内施設の安全管理に努める。 ・美化意識の高揚に努める。ゴミ処理、減量の改善立案。施設の安全改修に努める。 ・教育相談活動を積極的に進める。生徒支援活動をより拡張して推進する。	保健室利用状況を関係職員で情報共有し、生徒の心身の健康維持増進に役立てる。必要に応じて、専門医との連携をとる。		
				保健日より毎月1回発行。生徒委員会活動を活性化させる。		
進路	キャリア教育課	・一学年(1月進研)総合3教科 50以上120名以上 ・二学年(1月進研)総合3教科 50以上100名以上 ・三学年(進学結果)国公立大90人以上 (AO・推薦50人以上) (一般入試40人以上) センター受験率 80% (二次受験 65%) 四年制大進学率 70%	・教科指導体制の確立 進路実現への実力養成を目的とした教科指導計画の作成とその実践 ・進学体制の確立 3年間を通じた進学指導を実践し、四年制大学進学率70%の達成	センター試験まで軸足を学校に置いた理系5教科7科目、文系6教科7科目・3教科4科目による教科指導を継続する。		
				外部模試・実力考査の成績上位者を掲示し、進路意識の高揚と学習意欲の向上を目指す。		
部	情報課	・ホームページ更新 ・職員研修 ・情報機器の点検 ・図書館の活性化	・ホームページを月1回以上の頻度で更新する。 ・年間2回以上の情報研修会を実施する。 ・学期に1度は情報機器の点検を実施する。 ・年間読書数 5,500冊	長期休業中の課外及び土曜講座の年間実施日数は長期休業中課外(20日～25日間)、土曜講座(月2回程度)を確保する。		
				夏季・秋季・冬季休業中にキャリア教育・集団学習会を実施し、進路意識の高揚と学習指導の充実による学力向上に取り組む。		
				課外、土曜講座の出欠統計の上位クラスを毎月5日までに掲示し、出席率の向上を図る。		
				大学、企業、地域との連携によるキャリア教育を1学年5回、2学年3回、3学年3回を実施する。		
				2・3学年保護者対象の進路説明会を実施し、生徒の進路実現に向けての支援体制を整備する。		
				ホームページの更新を月に1回は行い、保護者・地域・同窓会・中学生への情報公開を活発化する。		
				職員のニーズや県の取組みに合わせた内容の職員情報研修会を企画し、実施する。年間2回以上の実施を目指す。		
				情報機器の点検を学期に1回は実施し、管理を徹底する。また、ICT環境のより一層の充実に努める。		
				読書数増加に向けて具体策を講じ、数値目標の達成に努める。		

部分掌・学年		評価項目	具体的目標	具体的方策			
進路部	支	・支援が特に必要な生徒の修学保障と進路保障を図る。	・校外での支援の連携を効果的に図る。必要に応じた家庭訪問の実施	生徒の修学困難な理由を早期に把握、分析してその課題解決のための手段を講じる。経済的・個別的な教育課題を抱えた生徒等の支援を行い、確かな修学・進路保障を図る。			
	援	・就学・就労保障のための支援体制の構築を図る。	・高同推の進路担当者会の参加により生徒に還元できる情報収集	就職、公務員希望者の進路実現達成のための支援を図る。また高進協、進保協、職安との連携を通じて適正な選考が行われるように 就学・就労支援に取り組む。			
	課	・支援金、奨学金等の案内を通じて、生徒の進路の支援につなげる。	・経済的支援制度の家庭の実情に応じた活用	日本学生支援機構をはじめとした奨学金の情報を伝え、進路保障のため保護者・生徒が活用しやすいよう理解を深めるための対応を行う。また支援金や給付金について事務室と連携して取り組み、生徒一人一人の教育環境等の把握に努め、支援につなげる。			
研修部	研修による指導力の向上		・校内・外研修体制の充実を図り、職員研修の推進により教育活動の活性化に取り組む。	転任者研修会及び職員研修会を各分掌と調整し実施する。 初任者研修、2年経過研修、5年経過研修など経年研修を実施する。 運営委員研修会を年間2回実施し、各部・課間の運営調整を行う。 センター研修、公開授業等の案内を行い、職員の積極的参加を促す。			
			・全職員参加の授業研修を実施し、授業改善に努め、教科指導の充実を目指す。	全学年対象の公開授業週間を7月に2週間設定し、事後に意見交換の研修会を実施する。 授業研修会（公開授業）を9月に実施し、中学校、塾、保護者、地域に向けた広報活動も行う。 校内研究授業の実施に向けて、授業改善検討委員会との連携を行い、情報の共有、わかる授業の実践を図る。			
			・研究紀要「紀要南薫」を発行し、各研修等の成果を普及する。	研修への参加報告及び各行事の実施報告書、要項等も記載し、次年度の資料として有効活用できるように作成する。			
	学	・出席率 授業出席率 99.5% 課外出席率 98.5% ・家庭学習時間 1日平均120分 ・1月進研模試 英国数偏差値 50以上の生徒 120人以上	・基本的生活習慣の確立 ・授業規律の確立と基礎学力の定着	挨拶の励行、適切な言葉遣いの指導、校歌指導等の徹底。 学年行事（自立と協働を学ぶ体験活動）を効果的に活用し、集団生活を通して社会性を養う。 チャイムからチャイムまでの授業を実施することで、授業規律を確立するとともに、小テストや週テスト、課外授業やそれらの事後指導を有効活用する。 ICT機器活用、アクティブラーニング授業等を実施し、「分かる授業」を展開する。			
年	・出席率 授業出席率 99.0% 課外出席率 98.0% ・家庭学習時間 1日平均140分 ・1月進研模試 英国数偏差値 50以上の生徒 100人以上	・基本的生活習慣の確立 ・授業規律の確立と基礎学力の充実	進路指導部と連携を図り、進路意識の高揚と早期進路目標の確立に努める。 教育活動全般を通じて人権意識の高揚につとめる。 時間厳守、出席率向上に取り組み、基本的生活習慣や規範意識を身につけ、凡事を徹底させる。 授業、学校行事等で、自ら課題を発見し、克服していく経験を積ませる場面を設定し、課題解決力を身につけさせる。 習熟度別授業による生徒の能力に応じた授業の実践により、個々の基礎学力の定着と向上を図る。				
部		・進研模試における数値目標のクリア ・将来を見据えた進路目標の設定 ・人権意識の高揚	模擬試験に対する取り組みを充実させるとともに、結果を分析し、適切な進路指導を実践する。 進路指導部と連携し適切な進路情報の提供と進路意識の高揚に努める。各学期に進路面談を行い適切な進路選択と進路目標の早期実現を図る。 学校生活全般を通して、校訓の精神を自覚させるとともに、人権意識の高揚に努める。				

部分掌・学年		評価項目	具体的目標	具体的方策			
学 年 部	三 学 年	<ul style="list-style-type: none"> 出席率 授業出席率99.0% 課外出席率96.5% 家庭学習時間 1日平均160分以上 進路目標 国公立大学 90人 四年制大学進学率 70% センター受験者 80% 二次試験受験割合 受験者中65% 	<ul style="list-style-type: none"> 進路目標達成に向けた教育活動の実践および自主・創造・親愛の精神と愛校心の育成を目指す。 	進路指導部との連携を強め、進路意識の高揚を図る。また適切な進路情報の提供や個別面談を重視し、生徒一人一人の第一希望進路達成のため全力を尽くす。			
				習熟度別クラス編成と習熟度別授業の実施、放課後学習（含む遅刻・欠席指導）の充実等により、学力の向上を図る。			
				課題提出の徹底。家庭学習時間の確保に努め、自ら学習する意欲を高める。			
				進路説明会や学年通信を利用し、進路情報を適切に保護者に提供し、学校・生徒・保護者が一体となった進路指導の実践に取り組む。			
				校外模試の結果を迅速・適切に分析し、生徒の実態把握と目標達成のための具体策を講じる。			
	英 語 コ ー ス	<ul style="list-style-type: none"> 英検 2級→卒業までに7割合格（13名以上） GTEC(3年次) GRADE 5 7割以上 国公立合格者 5割 	<ul style="list-style-type: none"> 4技能をバランスよく身につけた英語力の伸長 自国文化を再認識し異文化を理解する態度の育成 国際社会においてたくましく生き、活躍できる人材の育成 	必修科目だけでなく専門科目授業においては更に、実践的な活動を多く取り入れた授業展開を心がけ、英語運用能力の伸長を図る。			
				英検や GTEC、TOEIC などの資格試験受験を奨励し、合格者数増加を英語運用力向上の原動力とする。			
				大学での研修、校内行事等、英語コースとしての特色ある教育活動を展開する。			
				英語コースの活動が発表できる場を設ける。また、コースの活動について一般生徒にも広く知ってもらう。			
				英語での授業実践を学び、指導力を向上するため、教員が積極的に他教員の授業を参観し、自己研鑽に努める。			